

明治学院大学 心理学部 教育発達学科

「ここを探り、人を支える」。これが教育発達学科と心理学科を擁する心理学部の教育理念です。教育発達学科は教員養成を主とする学科としては珍しく心理学部にあり、心理学を教育の基盤の一つにしている点が大きな特長です。



■大学生
久保山咲子 さん



■先生
水戸博道 先生



■卒業生
花房峻 さん

CONTENTS

- プロフィール
- 大学生活について
- 就職活動、仕事について
- 5年後に向けて
- 高校生へのアドバイス

●プロフィール

明治学院大学 心理学部の特長を教えてください。



■先生

多くの大学に心理学科は設置されていますが、学部として存在しているのは多くないと思います。本学は規模的に大きいので、心理学の中のいろいろな分野の先生が揃っていて、学部として充実していると言えます。

花房さんが1期生になりますが、2010年4月からは新たに教育発達学科という教育系の学科が心理学部の中にできました。私は教育発達学科ができた時から本学に赴任しま

したが、もともとは心理学部もいち学科でした。それが学部に昇格し、そこからさらに学科が一つ増えたということです。

学部と大学院の連携にも力を入れているそうですね。

■先生

新入生の中には、大学に入る時点で大学院まで進むことを想定している方もいますので、学部と大学院との連携は重要です。

2016年の春からは、大学院心理学研究科の心理学専攻に加えて、新たに教育発達学専攻が設置されます。これに伴って免許状も一種免許状から、グレードが上がった専修免許状が取得できるようになります。教育発達学科の学生は、これまでも心理学専攻の教育発達心理学コースには進学できましたが、新しい専攻は、心理学部教育発達学科の上に存在する大学院ということで今まで以上に学部と大学院がつながります。

近年は大学院への進学者は多くないのが現状です。しかし、明治学院大学大学院の心理学研究科は志願者が多く、難関になっています。

この理由がまさに、大学院修了時に諸資格を取得できることにあります。特に臨床心理士に関して言えば、受験資格を取れる大学院はそれほど多くなかったこともあり、学部昇格の際に積極的に他大学との差別化を図りました。

大規模であり教育関連も学べる学科がある点、そして学部と大学院をつなぐ教育と諸資格の充実が本学の心理学部の特長だと思います。

心理学部の2つの学科は、どのようなことを学べるのでしょうか？

■先生

心理学科では心理学の様々な理論や実践を学べます。教育発達学科はひとつの大きな目標が初等の教員養成です。通常は教育学部の中にある学科がなぜ心理学部の中にあるかというと、今、教育現場はとても難しい状況になっており、様々な心の問題に適切に対処できる人材が強く求められているからです。

いじめ、不登校、学力低下、学習意欲の低下などの問題がひと昔前から比べると急激に深刻化しており、これらに対応するには心理学の知識、特別支援の知識、そして教育学知識などを総合して勉強しなければ、有望な人材が育成できません。

こうした背景から、心理学部の中に教育系学科があることが大きな強みになっています。取得可能な免許は、小学校教諭、特別支援学校教諭、幼稚園教諭の一種免許状と、ほかの大学と同じですが、心理学を通して問題対処能力を高めた上で免許を取得できるということです。

●大学生活について

現在はどうな勉強をしていますか？

■大学生

2015年から3コースに分かれて個人の専攻が決まるようになりましたが、私たちの代ではその制度がなかったため、3年次からゼミに入って師事する先生の領域について学ぶようになります。私たちの代は、皆教育や心理学のことを並行して学んでいます。

今は2年生なので、ゼミはこれからですね。先生たちが学生の希望を振り分けて、ゼミ決めをしているところです。私は第1、第2希望共に特別支援を領域にしたいと考えています。

■先生

今は保育士試験の真っ最中ですね。

■大学生

はい、そうです。明治学院大学で講座を開いていただいて、2月中は様々な学科から受講生が集まり、皆で学んでいます。



■先生

小学校や幼稚園教諭の免許は卒業と同時に取れますが、保育士資格は、本学科では取れません。久保山さんのように、在学中に試験を受けて取得する学生が多いため、教育キャリア支援課というところで資格取得を助ける講座を開いています。

大学生活で頑張ったことはありますか？

■卒業生

私はサークルで軟式野球をやっていました。もともとあったサークルですが、自分の代と後輩からどんどん増えていった感じです。多くの仲間と出会うことができとても充実していました。

■大学生

中学、高校の6年間は大所帯の吹奏楽で活動してきたこともあり、大学では何にも属さない自分を体験しようと、今は特に入っている組織などはありません。サークル活動ではありませんが、春や夏のオープンキャンパスでは学生スタッフとしてお手伝いをしています。パンフレットや願書などを扱う資料配布コーナーの担当として、参加してくれた高校生がなごやかに過ごせるように工夫しつつ、この大学の魅力を伝えています。アルバイトはたくさんやりましたね。1年次では衣料品店で9ヶ月間、2年次から最近まではテーマパークのスタッフとして働いていましたが、最近親から「3年生からはちゃんと勉強するように」と言われてしまいました（笑）。



■先生

私も教えていましたが、久保山さんは1、2年生の時にしっかり勉強していたので、サボっていたわけではありません（笑）。彼女は歌が上手なので、テーマパークで歌っているのかなと思っていたのですが、そうではないようです。

この大学に入ろうと思ったきっかけはなんですか？

■大学生

母親が2007年～2009年に、当時の明治学院大学院の心理学研究科教育・発達心理学コースに通っていました。母は保育士として働いており、キャリアを積む中で保護者ともう少し綿密に話をしたい、相談に乗れるようになりたいという気持ちから勉強したかったと聞いていました。そのため私も小学生の頃に、白金キャンパスに何度か足を運んだことがあります。レトロな雰囲気の大学なので小学生の頃からいいなと思っていましたね。母の影響は大きく、先生のことや充実した勉強内容のことを聞いていたので、楽しそうだと思えたことが大きいです。あとはやはり、先ほど先生もおっしゃっていましたが、心理学の中で教育が学べるのは、私がオープンキャンパスに参加したり高校生の時に調べたりした中でも、なかなかない特色だったのでぜひ行ってみたいと思っていました。

■卒業生

明治学院大学というよりも、高校生の頃に漠然と人の心に興味を持って、心理学を学びたいと考えていました。この大学以外にもいろいろな大学のオープンキャンパスに行って、商学部などの模擬授業も受けましたが、やはり心理学が一番だなと感じました。

あとは当時の卒業後の進路の候補として教員を考えていたため、その可能性を捨てないように心理、教育を中心に見ていました。

周囲からもアドバイスというほどではありませんが、明治学院大学は心理学に力を入れているとい

うような話を聞いていました。

教育発達学科の学生にはどんな方が多いですか？

■先生

教育発達学科に来る学生は教育に興味があり、免許を取りたいという方が多いです。入った時点から「将来は教員になる」といった強い目的意識を感じます。

教員と学生の距離は近いですね。教育発達学科の学生はすぐに打ち解けて先生と仲良くなります。教員側も知っている学生がいれば話ながら歩いていますし、学生側もなんのためらいもなく声をかけてくれます。そういう面言えば教育発達学科の学生は異色というか、先生と学生の距離が圧倒的に近いですね。



実習の授業が多いことも理由のひとつかもしれません。例えば私のピアノの授業はおよそクラス25名です。毎週その人数で教えているため、だいたいの顔と名前が一致します。ほかには美術、体育、家庭科など、教科の授業も少人数なので、先生と学生間や学生同士の仲が深まりやすいのではないのでしょうか。

大学に入ってから感じたことはありますか？

■卒業生

友人が進学した他大学と比較して、明治学院大学は先生との距離が高校と変わらないと感じていました。また、同期の学生の印象は真面目で、自分のやるべき目的をしっかりと持っている学生が多かったと思います。授業以外でも、進路の相談をしたり、勉強に必要な情報交換をしたり、お互いに助け合っていました。

■大学生

私は勉強できる内容や学校の施設に期待を持って入りました。

実際に入学してみると、施設はもちろんですがそれ以上に学ぶ仲間と先生の人柄に感動しました。いつも一緒にいる友人や学科全体が本当に大好きで、ここまで周囲の人間関係が良かったのは初めてです。とても感謝しています。

少人数で討論を重ねたり、授業中も近い関係にあったりするからだと思いますが、やはり教育発達学科はアットホームな雰囲気があり、気持ちよく勉強ができます。

印象的な授業はありますか？

■大学生

2年次に「教育発達学方法論（体験活動）」という授業で、週に1度横浜市立の小学校にティーチングアシスタントとして参加します。

具体的には、小学生の学習支援をしており、クラスの授業テンポについていけない子どもに、声かけや補助をしたり、「取り出し指導」といって勉強に遅れのある子どもたちと、別室でゆっくりと学習を進めたりと、子どもたちと、マン・ツー・マンで向き合う機会をいただいています。

活動中も学科内の各人がそれぞれの小学校に行くため、誰がどういった体験をしたのか、年に数回集まって報告会をします。報告会は討論の場ではありませんが、いくつもの体験談や自分とは違う視点からの意見が聞けて勉強になっています。

学校によって学生に求める内容が違うため、根本的には学習支援ですが、特別支援のクラスに入る人もいれば、一般のクラスに入る人もいて、4月の報告会では特に子どもの対応に困っているとい

う悩みを打ち明ける内容が多いです。「子どもが脱走しちゃいました」「子どもがけんかした時にどう仲裁をしたらよいか」など、自分が経験していない悩みを皆オープンに話してくれるので、互いに親身になってアドバイスをし合っています。

■卒業生

私も「教育発達学方法論（体験活動）」は勉強になりました。

実習は子どもと直に接することができる良い機会ですし、この経験を経た仲間たちが語る話もとても貴重だと思います。

■大学生

基本的には2年次の年末で終わりの日程ですが、意欲のある学生はそれ以降も通っていますし、学校側からお願いされるケースもあります。私自身も現在も小学校に行っています。そこでのおののが日誌を書くので、これを見せ合うと話題の量がものすごく増えます。

■先生

これは教育発達学科オリジナルの必修授業です。2年生から教育現場に出ることは珍しいため、ほかの大学からいらした先生からも「普通の2年生とは問題意識がまったく違う」と褒めてもらっています。この実習を通して高評価をいただき、教育実習も同じ学校に行き、教員採用を受けて初任がその学校という学生もいます。



■大学生

いますね、すごいですよね。

実習が早い分とても不安ですが、手探りであるからこそ得られたものはとても大きいです。給食もいただけるので健康的な生活を送れます（笑）。

●就職活動、仕事について

大学院に進むか就職するかで迷いはありませんでしたか？

■卒業生

それは悩みました。

院に進む一番のきっかけになったのは、4年生の時の教育実習です。そこで1ヵ月ほど子どもと触れ合う中で、自分なりに考えていた子どもたちの問題を明らかにしていきたいと強く思うようになりました。

■先生

教育実習は小学校の免許を取るために、実際に小学校に行って1ヵ月ほど教える経験をします。100名ほどが実習するので、都内や横浜周辺のいろいろな公立小学校に行きます。これまでのお付き合いがある学校もありますし、新規に引き受けてくださる小学校の開拓もしています。

大学院ではどのような研究をされていますか？

■卒業生

中学生の部活動をテーマに、中学生がどのような心理や意識で部活動に取り組んでいるのかを研究しています。実際に中学校に行きアンケート用紙を配り、複数ある設問のどこに当てはまるかという回答をもらっていました。私はそれを夏と秋の2回行って、時期によって意識が違うのかなどを集計・研究していました。

中学生はとても難しい年代で悩みも様々です。勉強はあまりしたくない、楽しいと感じている人は

部活をもっとやりたい、友人とは仲が良いが先輩・後輩関係が嫌だ、など人間関係で悩む子どもが多いという印象です。こうした意識や悩みを集約して、教育の未来に役立てたいと考えています。

院を卒業してからは教育関係の企業に就職が決まっています。

就職活動では教育にこだわらず様々な業界を見ていましたが、最終的に行き着いたのは教育や人に深く関係するところでした。

また、大学院では研究や調査に関わっていたため、最終的に研究職にも戻れる環境は残しておきたいと思い、今の企業に決めました。主な業務としては、文科省と協力して教育の現状についての調査を行い、教育に関する理論を発信していくことです。今現在は正式な配属先は決まっていないため、教育系の教材づくりといった現場に関わるかもしれませんが、将来的には研究に関する業務を志望しています。

● 5年後に向けて

将来の夢はなんですか？

■大学生

中学、高校生の頃は将来の夢は輝いているものだと思っていましたが、大学に入ってから「未定です」というのが一番正直な答えです。

私が考えていた夢のひとつにテーマパークのスタッフがあり、これを本当の職業にするか教育の道に進むかを悩んでいたため、2年生の時にスタッフのアルバイトを1年間やりました。その結果、今は教育の道の方がいいのかなと思っています。保育士の講座を開いてもらっていますし、チャンスがあれば手に職を持つようにしなければと考えています。保育士には保育園の保育所勤務の方と、施設に勤務する方がいますが、私は後者の方に進んで発達療育センターで発達に遅れがある子どもたちの支援に携われたらなと思っています。

■卒業生

研究所で仕事をしているのが理想です。

配属次第では小中高校の現場に毎日のように行くこともあると思うので、その現場の先生と接する中で見つけれられるものがあればいいと思います。

一度は博士後期課程に進もうかと思ったこともありましたが、外の世界を知らなければと思い直しました。研究関係の仕事を外で試みて、そこで自分がどう思うかが重要です。例えばその時に再度博士後期課程への道を志したとしても、一般企業でどのような調査研究が行われていて、どのようなものが望まれているのかを学ぶ良い機会だと考えていました。それはまったく遠回りではありません。自分の考えを見失わずに楽しく働いていることが夢ですね。



■先生

私たちの世界は若い頃から生き残るために研究業績を積み重ねなければならない部分があります。

私自身はこの先も好きな研究をしていきたいのと、あとは学生さんを育てる方にシフトしていきたいです。私がしている研究は特化されていて、今書いている論文がそのまま授業で使えるかといえそうではありません。研究と学生教育がつながっていないことはありませんが、直結はしていない面もあるので、彼らが教員になった時や社会に出た時に寄与できるような指導を重点的に行っていきたいと考えています。

●高校生へのアドバイス

高校時代にやっておけばよかったことはありますか？

■卒業生



私は陸上部でしたが、高校でしかできないことの一つに部活があるのではないかと思います。同じ部活動でも中学生よりはそれなりに考えているし、かといって大学での部活はアスリートを目指すような本格的な印象があります。その点、高校の部活には特別な印象があります。当時は自分自身では頑張ったつもりでしたが、今思うともっと頑張ることができたと思いますし、同時

に仲間とのつながり方もあったのではないかと思います。

進路に限って言えば、英語に注力すれば良かったと思います。中学生の頃は英語がとても得意でしたが、高校生になって少し油断をした際に英語が分からなくなりました。周りにも高校生になってから英語が分からなくなった人はかなりいます。

あとは高校に留学ができるシステムがあったので、利用して外の世界とのつながりを持てば視野が広がってさらに楽しい高校生活になったのかなと思います。

■大学生

数多く失敗しましたが、振り返って考えればその失敗が今の自分を作っているのもなんですがやり切ったなという感じです。

私は高校生のうちから何かを準備するよりも、高校生だからできることを充実させて欲しいです。専門的な勉強は大学に入ってからできるので、その専門分野に入る前に高校でできる勉強や目の前に開かれている道を見据えて基礎を作っていくことが大事です。

私は明治学院大学にAO（アドミッションズ・オフィス）入試で入学しました。

AO入試では一般入試のようにテストがない代わりに、面接や小論文がありますが、その際に高校の部活動でしていたことなど、人柄を知るための質問をよくされました。その時にアピールできる要素をどれだけ持てるかは、高校生活の充実度に関わってくると思います。これだけ勉強してきて知識があるということよりは、高校でこんな経験をしてこんな人間です、というアピールができれば良いのではないかと思います。

■卒業生

お手本のようなアドバイスですね（笑）。

■先生

だからAO入試も通ったんですね（笑）。

進路選択や受験勉強のアドバイスをいただけますか。

■卒業生

メリハリが大切だと思います。私は“息抜き”と称してオープンキャンパスに行くのが好きでした（笑）。オープンキャンパスに行くと、この大学の先生は面白いなと知ることができますし、反対にちょっと違うなという雰囲気も感じることができます。それは行ってみなければ分かりません。

勉強の工夫としては、やり方が人によって合う、合わないがあると思うので、自分で「これでいい」と思える方法を見つけることです。1日中英語を勉強できる人もいれば、1時間おきに教科を変えなければ嫌になってしまう人もいます。こういったことを高校3年生になってから知るの

では少し遅いかなと思います。

■大学生

先輩も言っていましたが、私も直接足を運んで見に行くことはおすすめです。オープンキャンパスなどではスタッフに大学生がいるので、学生の髪型から服装まですべて見られて、雰囲気は自分に合っているかが分かります。

高校と大学の学問とのつながりはどこにあるのでしょうか？

■先生

例えばバスケット選手になりたい人がいるとします。速く走れない、飛び上がる筋力がない、動体視力が低いというのは普通の生活ではさほど影響はありませんが、良いバスケット選手を目指すのであれば大きな影響があります。

同じように、大学に入って特化した勉強をするにあたって、高校の勉強との直接のつながりは常に見えるわけではありませんが、

大学の専門性というのは広範な学問分野を土台として成り立っています。高校での様々な勉強が後で大学の研究に必ず役に立ちます。

私たちはこの年齢になってから、もっとあの勉強をしておけばよかったなということがたくさんあります。数学は嫌いでしたが、論理的な思考を学べます。体育も嫌いでしたが、体力はその後の人生で必要です。論文を書き始めれば文章力も必要になります。どれひとつとして不要なものはありません。

私立大学は入試科目が少ないですが、今の時期はあまりそこだけに特化せずに目の前の勉強を頑張っ

最後に、この学部の素晴らしさを教えてください。

■先生

本学は教育学だけにおさまらず特別支援や心理学という領域からも子どもの支援にアプローチしています。すると様々な角度から“教育とはこうあるべきだ”という方向性が見えてきます。ここで勉強することによってこれまでにない教育の方向性が見えてきて、それを学ぶことができる大学だと思います。



●インタビューに答えていただいた方々●



■先生

水戸博道先生

明治学院大学心理学部 教授

静岡県立清水南高等学校出身。武蔵野音楽大学音楽学部器楽学科卒業。ローハンプトン大学大学院博士課程修了。PhD 取得。新潟大学教育学部助教授、宮城教育大学教育学部教授、ロンドン大学教育研究所客員研究員を経て、現職。



■卒業生

花房峻さん

明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻博士前期課程 2 年（2015 年度取材当時）

私立桜美林高等学校出身。明治学院大学心理学部教育発達学科卒業。教育関係企業への就職が決まり、現在は自らの研究課題である「中学生の部活動」についてアンケート手法を用いた集計・研究に打ち込んでいる。



■大学生

久保山咲子さん

明治学院大学心理学部教育発達学科 2 年生（2015 年度取材当時）

横須賀市立横須賀総合高等学校出身。3 年次のゼミでは特別支援の領域を志望。学科内で心理学や教育理論の勉強をしながら、大学主催の講座にも積極的に参加し、保育士や幼稚園教諭の免許取得を目指している。